

## 話者の文法知識と読字習慣から見る文章読解能力 —文章への柔軟な対応力の育成をめざして—

新国佳祐 (東北大学大学院情報科学研究科 助教)

## ● 目的

国語教育・日本語教育を受ける学習者は、その将来において実に多様な文章の読解を求められる。その際、文章の読みが不適応となる例の一つに、文章中に現在では使用されないような文法が用いられている場合が挙げられる。個別言語の持つ文法は常に通時的変化(言語変化)を遂げており、その進行は100年程度の短いスパンでも見て取れる場合もある。したがって、特にその文章が産出された年代にかかわらず読みを困難なく進められる能力を文章への柔軟な対応力の一つと位置付けるならば、一方向的に出現頻度を減らしつつある文法現象に対して高い許容度(容認度)を持つことが、文章への柔軟な対応力を規定する要因になっている可能性がある。本研究では、上記のような変化の過程にある文法現象としてガノ交替(例：“太郎が買った本” ⇔ “太郎の買った本”)と呼ばれる日本語格交替現象に着目し、主に以下2点を明らかにするための実験調査(実験1, 実験2)を行った。

- (i) ガノ交替を容認する程度が、話者個人の過去/現在の読字習慣の影響を受けているか
- (ii) ガノ交替を容認する程度が、話者個人の(特に産出年代の古い文章を読む際の)読み能力を予測するか

## ● 実験1

(i)を明らかにするため、20歳代の日本語(東京方言)母語話者を対象に、1)ガノ交替容認性、2)過去/現在の読字習慣を尋ねるウェブ質問調査を実施した。ガノ交替容認度とは、ガ主語文(“太郎が買った…”)に対してノ主語文(“太郎の買った…”)をどの程度容認するかとして定義され、読字習慣は主たるものとして①過去/現在の読書習慣、②インターネットを媒介とする読字習慣を尋ねた。調査の結果、以下のことが明らかとなった。

- I. 特に12歳以降よく読書を行っていた者ほど、ガノ交替を容認しやすい
- II. インターネット媒介での読字機会が多い者ほど、ガノ交替を容認しにくい

## ● 実験2

(ii)を明らかにするため、19~24歳の大学生を対象に、1)産出された年の異なる文章の読解課題、2)ガノ交替容認性判断課題を課す実験を行った。1)においては、参加者の読みパフォーマンスを計測するため、文章の読み中の眼球運動を計測した。実験の結果、以下のことが明らかとなった。

- III. 現代に近い時代に産出された文章の読みパフォーマンスにはガノ交替容認度の影響は見られないが、古い時代(1950年)に産出された文章については、ガノ交替容認度の高い者ほどスムーズに読解することができる(図1)。

## ● 考察

上記二つの実験から、(i)については読字習慣の質によりその影響が異なっており、(出版された本の)読書は出現頻度を減らしつつある文法現象への容認度を高める方向にはたらく一方で、インターネット媒介での読字習慣はそれを低める方向に作用することが示唆された。おそらく、読書機会が多いとその分古い時代に産出された文/文章に触れる機会(すなわち現在では出現頻度の低い文法に触れる機会)も多くなること、ならびにインターネット上に存在する言語情報は基本的には言語変化の時間軸上における最新の文法が支配的であることがその理由であると考えられるが、いずれにせよ、例えば学習者への読書指導やICT教育の導入が彼らの文法知識の柔軟性や豊かさに影響を及ぼす可能性があることは指摘できる。さらに、出現頻度の低い文法現象を容認しやすい個人特性は、産出年代の古い文章をスムーズに読み進めることができる文章への柔軟な対応力と結びついていることが示された。

一般に、特に本研究でガノ交替容認度への読字習慣の影響が見られた12歳以降の国語教育においては、話者の文法知識に着目されることはほとんどない。しかしながら、以上の本研究の成果を踏まえ、国語・日本語教育の理論/実践において話者の文法知識の豊かさとそれに付随する文章への柔軟な対応力の育成に目が向けられることを望む。

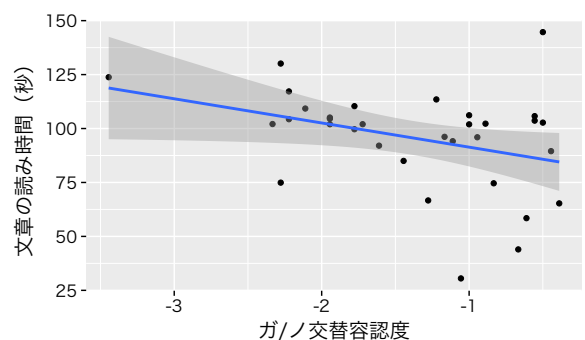


図1. ガノ交替容認度と産出年代の古い文章の読み時間